

## は じ め に

平成8年度は、5月に岡山県で発生した腸管出血性大腸菌（いわゆるO157）が、全国各地でも発生し、また、水道水中のクリプトスポリジウムが原因となった多数の下痢・腹痛患者の発生など、感染症対策の重要性を改めて認識させられたところでもあります。さらに、エイズ等に代表されるように輸入感染症や新たな薬剤耐性菌の脅威にもさらされている状況にあり、県民の健康維持のため、監視体制の見直し、強化に一層の努力をしていく必要があります。一方、オゾン層の破壊、酸性雨、地球の温暖化等、地球的規模の環境問題から騒音・振動、地盤沈下、生活排水、自動車公害等そして廃棄物処理問題などの身近な問題まで、極めて広範かつ複雑になっており、県民の環境に関する関心も今までにない大きな高まりをみせています。こうした状況のもとで本県は、環境基本条例の理念の実現に向け「環境基本計画」の策定を進めるなど各種の環境政策を積極的に推進しております。

当研究所では、本県の保健衛生・環境行政の推進に必要な科学的な知見及び技法を提供するため、試験・検査や基礎的な調査研究をはじめとして、「レジオネラの汚染実態把握と感染防止に関する調査研究」や「化学物質分析の迅速化に関する研究」を特定研究として実践するなど、多くの研究に取り組んでおります。さらに本県が積雪地域という特性を踏まえながら、酸性雨・雪移流機構解明の調査研究に取り組み、多くの知見を得ることができました。このほか、国際技術協力という観点から、昨年度に続き、インドネシアからの研修生5名を対象に環境関係の技術研修を実施したところであります。

このほど平成8年度における研究成果がまとまり、ここに新潟県衛生公害研究所年報を発刊することになりました。これらの内容について、皆様の忌憚のないご批判、ご意見を頂ければ幸いです。

さて、当研究所は平成9年4月に、衛生公害研究所から保健環境科学研究所として改称し、更に同10月には、保健環境科学研究所創設50周年記念事業を行い、過去の足跡や成果を再認識し、これからの長期的な展望を切り開いていく機会としたところです。職員一同今後とも一層、調査研究に励み、県民の皆様をはじめ関係各位のご期待に沿いたいと思っております。皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成9年12月

新潟県保健環境科学研究所長 貴 船 育 英